

# 西牟田寛元寺遺跡

福岡県筑後市大字西牟田所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第69集

2006

筑後市教育委員会

にしむたかんげんじいせき  
西牟田寛元寺遺跡

2006  
筑後市教育委員会

## 例言

1. 本書は平成16年度に筑後市教育委員会が行った西牟田寛元寺遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物・図面・写真等は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第Ⅰ章に記している。
3. 本書に使用した図面の遺構実測図は上村英士、阿比留士朗が作成し、遺物の実測、浄書は横井理絵が行った。
4. 本書に使用した遺構・遺物の写真撮影は上村、阿比留が行った。
5. 今回の調査に用いた測量座標は、国土調査法第Ⅱ座標系（日本側地系）を基準としており、方位は全て座標北（G.N）である。
6. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による。  
SD-溝 SK-土壤 SP-ピット
7. 本書の執筆・編集は阿比留が行った。

## 目次

I. 調査経過と組織	1
II. 位置と環境	2
III. 調査成果	4
IV. 小結	13

写真図版

## 序

本書は、平成16年度に行った西牟田寛元寺遺跡の埋蔵文化財調査報告書であります。

このたび報告する西牟田地区は、中世から西牟田郷と称し西牟田氏の支配していた城下町として栄えており、現在も近世期の古い町並みを見てとれる箇所も残している。

今回、発掘が行なわれた西牟田寛元寺遺跡は西牟田小学校の構内で行なわれており、調査期間は短かったものの小学生達に発掘現場での調査風景を真近に見てもらうことが出来、私達の住んでいる足下にも歴史が埋まっていることを認識してもらい、なおかつ歴史をより身近に感じてもらえる教材として子供達の記憶に残るものになれば幸いです。また、本報告書が歴史あるこの地域での郷土史や文化財の研究の発展に活用されることを期待しております。

最後になりましたが、本報告書の刊行にあたり、ご協力いただいたみなさまに、厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

筑後市教育委員会  
教育長 城戸一男

# I. 調査経過と組織

発掘調査に至る経過は、平成16年4月に開発原因者である筑後市立西牟田小学校から開発予定地の埋蔵文化財の取り扱いについて筑後市教育委員会に照会があり、これにより開発関係者との協議を行った。協議の結果、開発予定地で試掘調査を行い、遺跡が確認されたため開発予定地内の本調査を行うことで合意した。また、発掘調査は平成16年9月8日～同年9月23日と平成17年1月11日～同年1月19日と2回に分けて実施した。平成16年の発掘調査は阿比留士朗、平成17年の発掘調査を上村英士が調査担当した。また、今回の調査では2回に分けて実施したが、次数は用いずに調査区をA区、B区と分ける。

なお、発掘調査及び整理作業の関係者は次のとおりである。

## 調査組織

### 1) 平成16年度（調査・報告書）

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	菰原 修
庶務	社会教育課長	田中 優一
	文化スポーツ係長	成清 平和
	文化専門職	永見 秀徳 小林 勇作
	文化財学芸員	上村 英士（平成17年調査B区担当）
		立石 真二
		阿比留士朗（平成16年調査A区担当）

### 2) 平成17年度（調査・報告書）

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	菰原 修
庶務	社会教育課長	田中 優一
	文化スポーツ係長	角 恵子
	文化専門職	永見 秀徳 小林 勇作 上村 英士
	文化財学芸員	阿比留士朗（報告書担当）

### 5) 発掘調査参加者

地元有志

### 6) 整理作業参加者

整理作業員 平塚あけみ 仲 文恵 野口晴香 横井理絵 佐々木寿代 丸山裕見子

## II. 位置と環境

### 1. 地理的環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畠、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は、国道に沿って市の中心部に形成されている。

### 2. 歴史的環境

今回報告する西牟田寛元寺遺跡の位置する西牟田地区は、旧来三瀬郡西牟田町だったが、戦後の市町村再編により現在は、筑後市西牟田（小字名＝西牟田・寛元寺・野中・北牟田・流・久保・鷺寺・大和、等）、久留米市三瀬町西牟田（小字名＝本町・大坪・清道寺・田中・新栄町・富安・大立、等）と行政区域が二分されている。

西牟田氏の出自に関しては2通りの説がある。まず、関白藤原道隆の子孫で本姓は宇都宮という西牟田弥次郎家綱入道行西がこの地に地頭職として伊豆韭山（静岡県）から就封し、入部した地名をとって西牟田氏と称したとされているものと、元治二年の三瀬荘領家下文に「西牟田村名主行西」とあることから本名主としてもともと三瀬荘内に土着していたが鎌倉幕府の成立とともに地頭職として任命された小地頭と称される名主層御家人であったものとも言われている。いずれにしても鎌倉時代にはすでに西牟田という地名が使われていたのは分かるが、いつの頃からこの地名が使用されてきたのかは不明である。また、西牟田郷は西牟田氏入部以来多くの中世城館が存在していた。先学諸氏の研究などにより、西牟田氏の城である西牟田城址を中心に分かっているだけで西牟田郷内には西牟田館址、本村館址、西古賀館址、久保館址、弥吉上総家宅址など西牟田氏関連の居館の存在が知られている。さらに西牟田郷内外に寛元寺、松源寺、靈鷲寺、真光寺、正覚寺、宝善寺、慶雲寺などの寺院を建立し、城下町として発展していった。このような西牟田氏の支配体制は戦国時代まで続いていたが、戦国時代の末期になると西牟田氏が肥前の龍造寺氏と手を結んだ事により、農後の大友氏が天正七年（1578）に西牟田城攻めを行なう。それにともなって西牟田氏は生津城、城島城と次々に西側に城を移していった。

近世期になると西牟田の町は久留米藩主有馬氏の統治下に入る。資料は少ないものの近世の町の様子を垣間見る文献としては、元禄八年（1695）『久留米領郡中品々寄』のなかに「西牟田町通の長さ二丁三十六間」とある。また、町筋では日常品から、盆、正月などの季節用品などが交換されたり売買されていたりしていたらしく町家としての様相が伺える。現在でも、当時の面影を残している。

今回発掘を行なったのは寛元寺の北側に隣接した箇所である。この寛元寺は臨済宗南禅寺派の寺院であり、西牟田弥次郎家綱によって寛元年間（1243～1246）に創建されたとされている。『筑後市史』によると文献での寛元寺の初見は建長六年（1254）で「寛元寺阿弥陀・觀音両堂」とあり、それ以前の仁治二年（1241）までの文献には寛元寺の名称が見られない為に仁治二～建長六年の間に寺名が付けられたと推測している。また寛元寺は正平年間（1346～1367）には一時期征西將軍の祈禱寺に指定されている。

#### 【参考文献】

右田 乙次郎	『筑後市神社仏閣調査第三集（西牟田編）』	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会	1972
右田 乙次郎	『西牟田むらの生いたちの記』	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会	1973
筑後市編さん委員会・編	『筑後市史』	筑後市史編さん委員会	1998

1. 西牟田城跡
  2. 推定西牟田館跡
  3. 西牟田上京手遺跡
  4. 西牟田小次郎丸遺跡
  5. 西牟田寛元寺遺跡

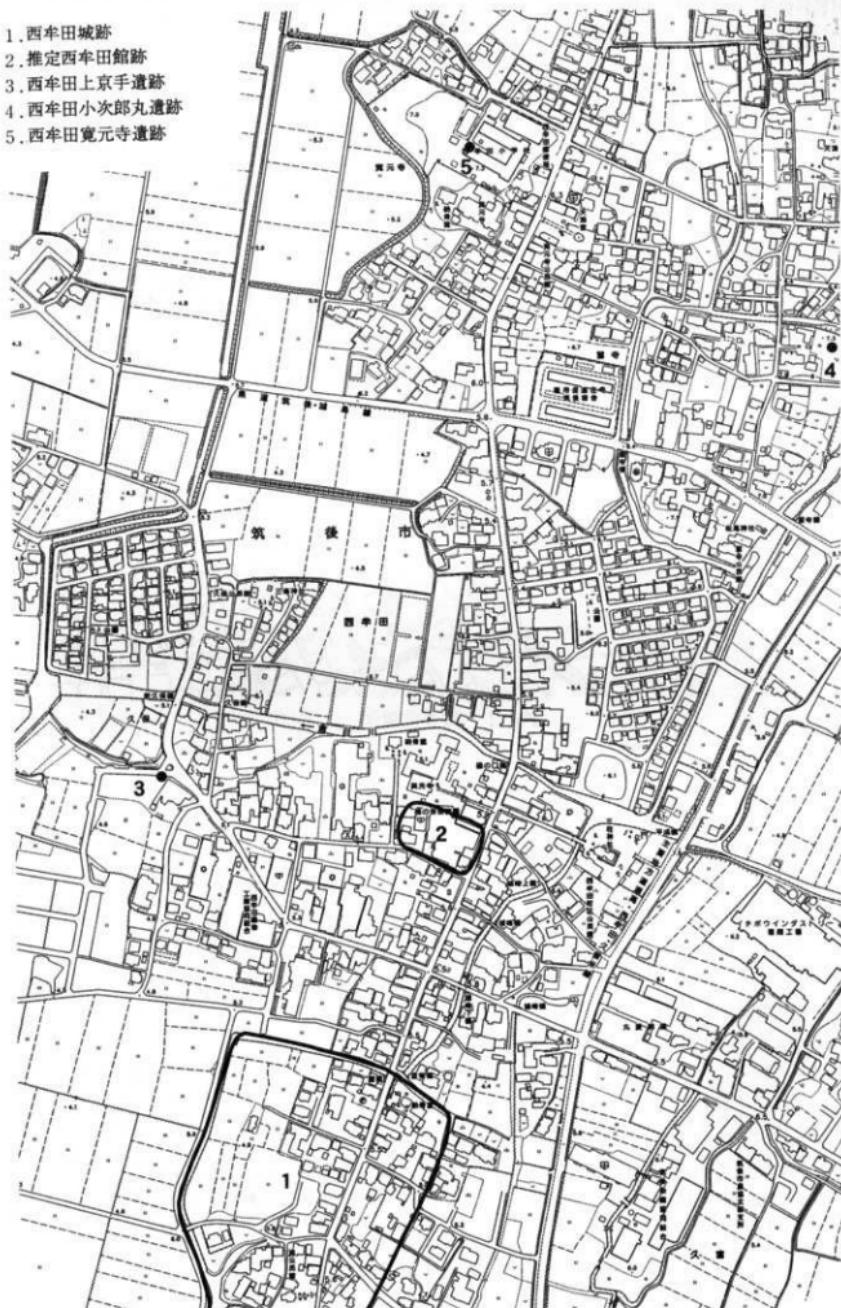


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/5000)

### III. 調査成果

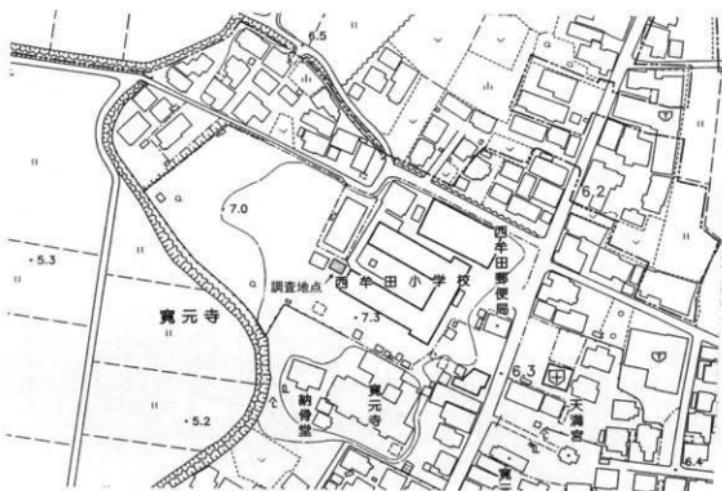


Fig. 2 調査位置図 (1/2500)

#### (1) はじめに

当遺跡は筑後市大字西牟田1802の筑後市立西牟田小学校内に所在しており、標高7mに位置し、現況から20cmほど表土を掘り下げた段階で遺構が検出された。調査面積は56cm<sup>2</sup>である。今回の調査は平成16年9月8日～9月23日までを阿比留が南側の半分の調査を担当し、平成17年1月11日～1月19日を上村が北側の半分の調査を担当した。

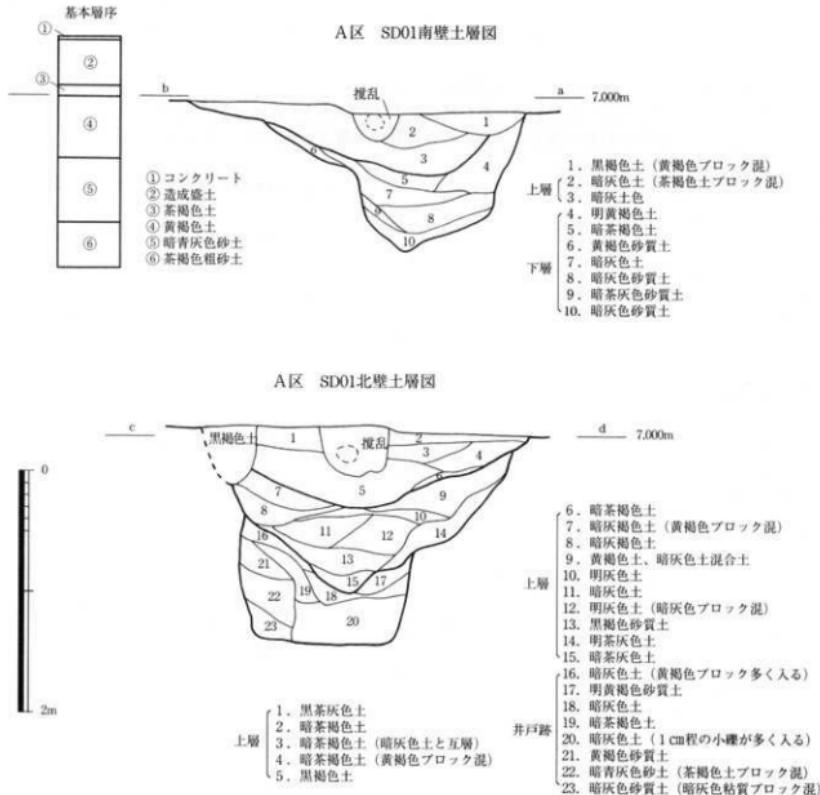
なお、今回の報告するにあたって便宜上阿比留が担当した南側半分をA区とし、上村が担当した北側半分をB区とする。

#### (2) 検出遺構

##### 溝（A・B区）

##### SD01 (Fig. 3・11, Pla. 1・4)

A区、B区ともに東側で検出された北東方向に走る溝である。上面幅2.0m～2.5m程度、深さは検出面から1.2m～1.4mを測る。溝の断面形態はV字形に近い形を呈する (Fig. 3 土層図下層)。調査区内で7.5m程の長さを検出したが、直線的ではなく若干ではあるが蛇行している。なお、一度掘り直しが行なわれていると思われる。深さ0.5m～0.7mに規模は縮小されてはいるが上面幅、溝のラインは基本的に前代から踏襲されている。溝の断面形態は緩やかなU字形を呈する (Fig. 3 土層図上層)。また、A区、B区の境にこの溝に切られた井戸を検出した。この井戸のSD01東側内は階段状にテラスが2段付く。



SD01出土遺物 (A・B区) (Fig. 4・5、Pla. 6・7)

A区における遺物取り上げ時に使用した上層、下層はSD01を掘り下げた時に層序ではなく、平均的に掘り下げたために土層図 (Fig. 3) における上層部分に関しては出土遺物が対応するとは限らない。

#### SD01A区上層

(1) 肥前磁器の染付碗口縁部片である。口縁部外面に薄く一重圓線と体部には草虫文を施し、内面は無文である。

(2) 配管を埋設した際に上層埋土から掘り返されたと思われる肥前染付皿である。見込みには、一重圓線とコンニャク印判による五弁花文、内面には草花文、外面体部には唐草文、高台脇には二重圓線、高台内には一重圓線と渦福が施されている。また、呉須の発色は悪く、胎土が灰白色を呈している。豊付には細砂が付着しているために波佐見産と思われる。

(3) 龍泉窯青磁碗底部片である。高台脇から縦に片範影が看取されるために片影の蓮弁文が外面に施

されていると思われる。また、施釉は高台まで行ない豊付および底部は露胎である。釉調は発色が良く青緑色を呈している。

(4) 龍泉窯青磁印花文碗である。口縁は外反しており、見込みには浅く不明瞭ながら草花文と思われる印刻を施している。外面にはヘラ削り痕が残る。また、釉調は、淡灰緑色で透明度が高く、全体に貫入が入る。高台内および豊付は露胎である。この遺物は土層図（Fig. 3）における下層出土の細片と接合されたので下層埋土に帰属する。

(5) 土師器小皿である。内外面ヨコナデ調整を施して、体部がら外反しながら開いている。底部には糸切り離し痕が残る。淡橙色を呈する。

(6) 土師器坏片である。内外面ヨコナデ調整を施している。色調は淡橙茶色を呈する。

(7) 土師器坏底部片である。底部には糸切り離し痕が残り、色調は淡橙茶色を呈する。

(8) 器種不明須恵器質土製品片である。外面に平行叩きを二方向に行なったため格子目状の叩き痕が残り、内面はナデによる調整である。また、長辺の両端は遺存しており、一辺は斜め方向に調整している。色調は暗灰褐色を呈している。

#### SD01A区下層

(9, 10) 土師器小皿である。9の復元による法量は口径6.4cm、底径4.7cm、器高1.8cmを測る。10の法量は口径6.6cm、底径4.7cm、器高1.8cmを測る。9、10は同タイプの小皿で、外面体部下半に強いヨコナデを施し、口縁部を直立させる。底部には糸切り離し痕が残る。色調は淡橙色を呈する。

(11) 土師器の小皿片である。復元による法量は口径8.6cm、底径6.6cm、器高2.1cmを測る。底部から口縁部まで直線的に立ち上がる。また、口縁部に煤が付着しているために灯明皿として使用したと思われる。

(12) 土師器坏片である。復元による法量は口径11cm、底径8.6cm、器高1.5cmである。淡黄茶色を呈する。

(13) 土師器坏である。復元による法量は口径12.1cm、底径10.2cm、器高2.5cmである。体部は内湾しながら立ち上がる。内外面ヨコナデ調整で、口縁に意図的か偶発のか沈綱状になるが口縁残存率が悪いため分かられない。底部には糸切り離し痕が残る。淡黄茶色を呈する。

(14) 土師器坏口縁部片である。口縁部外面に強くヨコナデを施している。淡黄茶色を呈する。

(15) 土師器坏片である。内外面ヨコナデ調整を施している。器壁は薄く、淡橙色を呈する。

#### SD01A区

(16) 肥前磁器碗である。外面には簡単な文様を書いており、内面は無文である。復元口径10.5cmを測る。

(17) 肥前陶器皿である。見込みには蛇ノ目釉剥ぎを行ない、高台脇から高台内まで露胎となる。また、外面に白土化粧を用いた刷毛目装飾を施し透明釉を掛ける。

(18) 土師器の鍋口縁部細片である。口縁部は折り返しによる玉縁状にし、内面は横方向にハケ目調整を施す。色調は淡橙茶色を呈する。

(19) 土師器小皿である。復元による法量は、口径9.4cm、底径7.5cm、器高1.5cmで底部には糸切り離し痕が残る。内外面ヨコナデによる調整を施し、色調は淡茶色を呈する。

(20) 土師器坏口縁部細片である。口縁部は若干外反している。淡灰茶色を呈する。

(21) 土師器坏底部片である。糸切り離し痕が残り、内外面ヨコナデ調整を施す。復元底径は8.4cmを測り、淡橙茶色を呈する。

(22) 石製品片である。砥石もしくは硯だと思われる。赤褐色を呈する石材である。赤間石か。

#### SD01B区

(23) 磁器碗片である。釉調は暗緑褐色、胎土は灰褐色を呈している。口縁は外反しており、口縁部

は軸が薄くなる為に明緑灰色を呈する。

- (24) 白磁もしくは染付の皿と思われる。口縁部細片のために不明。  
(25) 白磁碗細片である。口縁部は玉縁状となる。太宰府編年IV類。  
(26, 27) 備前産焼締陶器の擂鉢である。26の口縁部と27の底部が出土しており、それらは同一個体と思われる。色調は赤褐色を呈し、擂り目は1単位9本である。  
(28) 土師器小皿である。復元による法量は、口径8.5cm、底径7.1cm、器高1.5cmで底部には糸切り離し痕が残る。内外面ヨコナデによる調整を施し、色調は淡橙色を呈する。  
(29) 土師器小皿である。復元による法量は、口径8.5cm、底径6.5cm、器高1.65cmで底部には糸切り離し痕が残る。内外面ヨコナデによる調整を施し、色調は淡橙色を呈する。口縁には煤が付着しているために灯明皿として使用していたと思われる。  
(30) 土師器の鍋である。口縁部は折り返して玉縁状にしており、内面は丁寧なヨコナデ、外面はヨコナデと指頭圧痕が看取される。また、外面全体に煤が付着している。色調は淡橙茶色を呈する。

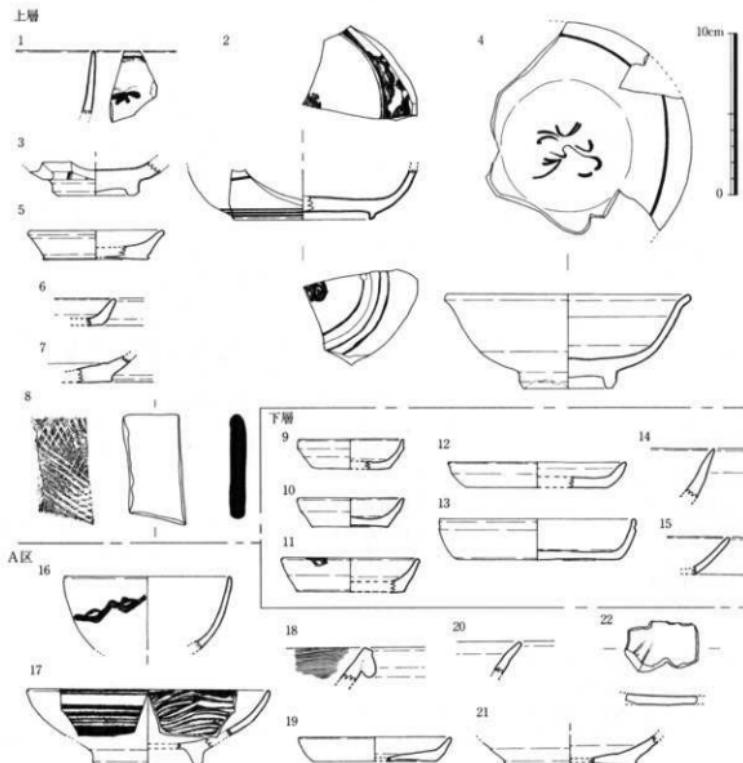


Fig. 4 SD01A区出土遺物 (1/3)

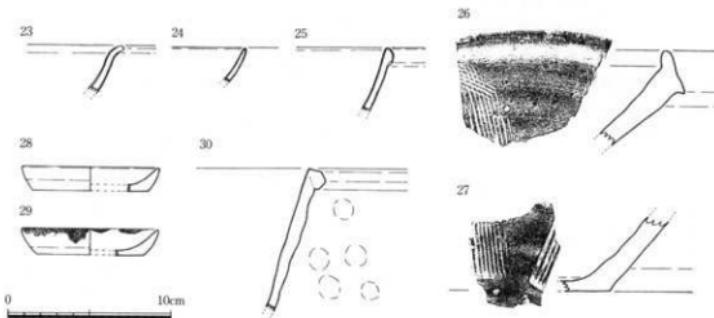


Fig. 5 SD01B区出土遺物 (1/3)

#### SD02 (A・B区) (Fig. 11, Pla. 2・4)

A・B調査区西側を北東方向に走る。溝の規模は上面幅0.6~0.7m、底面幅0.35~0.4m、深さ0.5m程の断面形態は逆台形を呈する溝である。B区ではSK06との切り合い関係が検出段階で不明瞭であったことや、両遺構とも黒茶色の埋土で近似していたために、SD02、SK06が同一遺構で「T」字状の溝になる可能性も否定出来ない。

#### SD02出土遺物 (Fig. 6)

(31) 陶器鉢口縁部片である。色調は茶褐色を呈し、胎土はキメが細かく淡赤褐色を呈している。内外面ともヨコナデによる調整である。

(32) 土師器鍋口縁部片である。口縁部は折り返しによる玉縁状にし、内面は横方向にハケ目調整を施す。色調は外面淡茶褐色を内面は煤の付着により黒褐色を呈する。

(33) 不明鉄器である。現存の長さ4cm弱であるが、両端のうち一端は折れているのが明瞭に看取される。また、断面形態は円形である。

#### SD03 (A区) (Fig. 7・11, Pla. 2)

A調査区中央付近から緩やかに湾曲して南側調査区外に抜けていくように検出された溝である。溝の規模は上面幅0.8m、底面幅0.65m、深さ0.8m程の断面形態は逆台形を呈する溝である。また、北側は堀方に向かって底面は上がっていっており、そのまま収束していっている。遺物は出土していないために時期は不明である。

#### 土壤

#### SK04 (A区) (Fig. 7・11, Pla. 2)

SD03東側に位置しており、南側は調査区外へと続き、西側はSD03に切られている。深さ0.7mを測り不定形を呈する土壤である。東側部分は検出面から0.2mに1段テラスを有している。また、0.2m程の焼土層が1層あるが、遺構内部に被熱の痕跡は見受けられない。遺物は出土していないために時期は不明である。

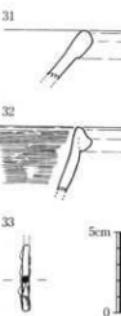


Fig. 6 SD02  
出土遺物 (1/3)

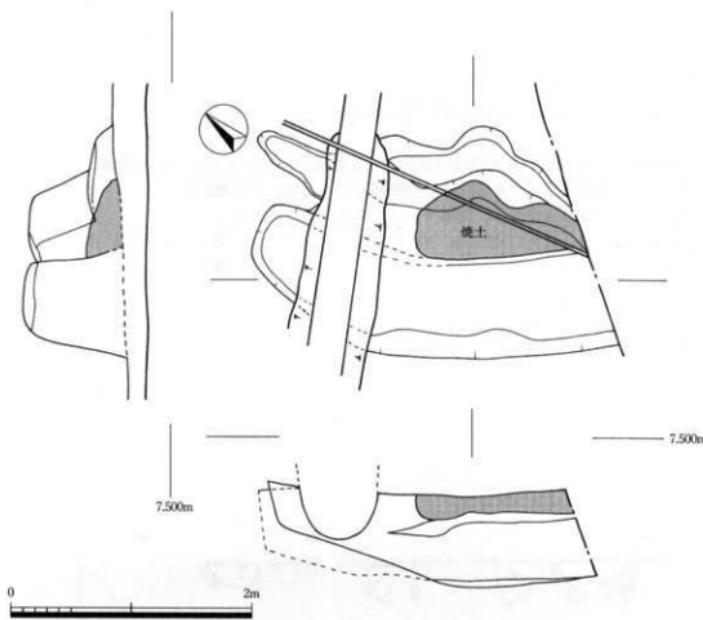


Fig. 7 SD03, SK04遺構実測図 (1/40)

#### SK05 (A区) (Fig. 8)

A区、B区の境に位置し、SD01を切る土壌である。長軸0.8m、深さは約0.15mを測る楕円形プランを呈し、東側には深さ0.05mのテラスが1段付く。

#### SK06 (B区) (Fig. 9, Pla. 5)

B区北西隅に位置しており、北側と西側が調査区外に続く。深さは0.35mを測る。SD02で述べたようにSD02と同一遺構の可能性もある。

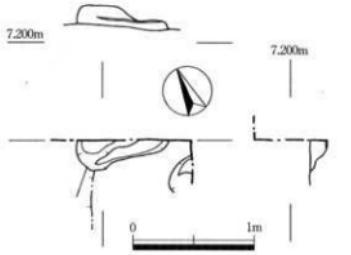


Fig. 8 SK05遺構実測図 (1/40)

- 1. 盛り土及び擾乱
- 2. 淡黒茶色土
- 3. 黒灰色土
- 4. 淡茶黒土
- 5. 黒茶色土
- 6. 暗黒色土
- 7. 茶褐色土
- 8. 明茶褐色土
- 9. 淡茶灰色土
- 10. 暗黒茶色土
- 11. 淡灰黒色土

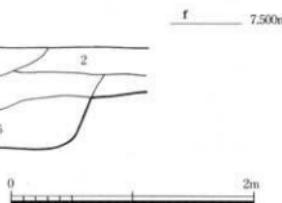


Fig. 9 SK06土層図 (1/40)

### SK06出土遺物 (Fig. 10, Pla. 7)

(34) 肥前磁器皿片である。口唇部には口銹が施されており、内面には矢羽文と思われる染付けが施されている。

(35) 肥前磁器皿である。外面文様は口縁部に一重圓線、体部には草文。内面は細片であるため文様は看取出来ない。直線的に立ち上がるため筒型碗もしくは猪口と思われる。

(36) 白磁輪花皿口縁部片である。釉調や胎土は暗灰白色を呈する。

(37) 白磁紅皿である。復元口径6.0cm、底径2.0cm、器高1.75cmである。口縁部は水平にきられており、その平担面から内面にかけて施釉してあり外面は露胎で蜻唐草文様が施されている。

(38) 陶器皿片である。釉調は黄色味がかった乳白色を呈し、胎土は淡灰褐色だが淡赤褐色の生焼け部分も残っている。

(39) 陶器鉢口縁部片である。高取焼と思われる。釉調は暗青色から青白色を呈し、胎土はキメが細かく淡黄茶色を呈す。

(40) 土師器甕底部片と思われる。色調は淡茶褐色を呈す。外面はヨコナデ調整が施される。

(41, 42) 粘土塊である。41は2.5cm程度、42は4 cm程度の明橙色を呈す。41には円形に抉りがある。土壁か?

(43) 内外面とも銀灰色を呈した丸瓦である。

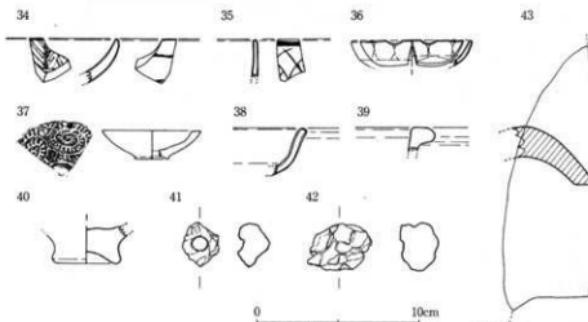


Fig. 10 SD06出土遺物 (1/3)

### ピット

#### SP07 (B区) (Fig. 11)

B区中央より南側に位置する幅0.15m、深さは0.4mを測る円形ピットである。

#### 井戸跡 (A区) (Fig. 3)

調査区のA区、B区境にSD01に切られた井戸を検出した。径0.85mの井筒の痕跡が土層下部で確認されたが、その上位部分では層位が乱れているために井戸を廃棄する際に井戸枠等の施設を抜き取ったものと思われる。また、検出面より1.8m掘り下げた標高5.2mで水が湧き出た。

出土遺物一覧	
遺構番号	出土遺物
SD01	陶磁器、土師器、石製品
SD02	陶磁器、土師器、鉄製品
SD03	—
SK04	—
SK05	土師器片
SK06	陶磁器、粘土塊
SP07	土師器片

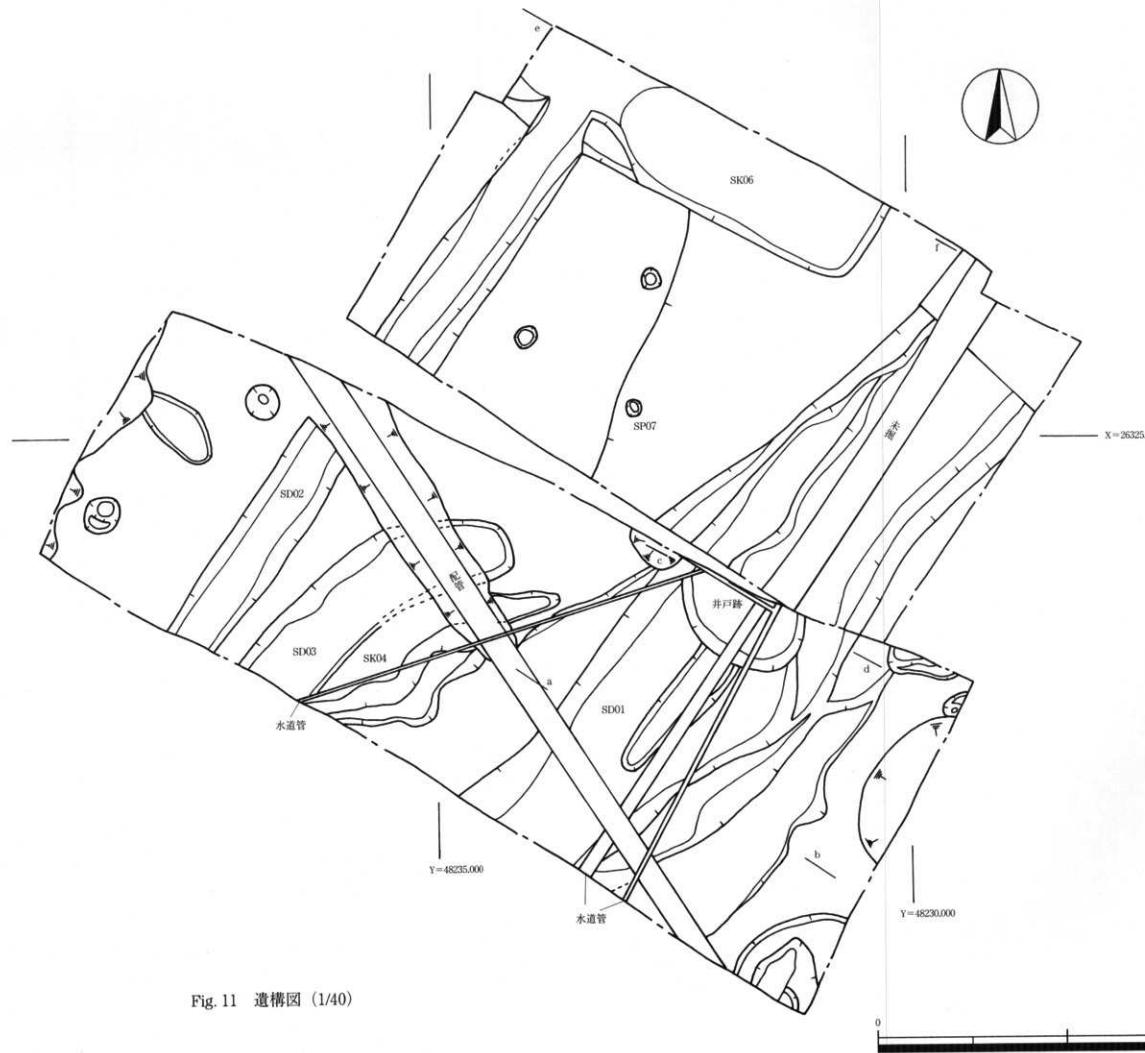


Fig. 11 遺構図 (1/40)

## IV. 小結

### SD01について

今回の調査で主だった遺構としてはSD01が挙げられる。この溝の特徴としては、中世期と近世期の2時期の遺物に片寄り、下層取り上げの遺物には近世期の陶磁器を含まず、中世陶磁器類は時期的にばらつきがあるものの土師器の小皿は16世紀代の範疇に入るものと思われる。そのために下層の埋没はこの時期になり、規模の縮小された上層の溝に整備され直されたと考える。また、上層（土層図Fig. 3 上層掘り返しと思われる配管設置時の擾乱も含む）の遺物には概ね幕末期の肥前陶磁器が出土するためにこの時期に最終埋没したと思われる。また、このSD01が中世から近世にかけて継続的に存在したのか、この2時期だけ単発的に存在したのかという問題もあるが、SD01の上面幅がほぼ同じであることや、溝の走る方向などが同一方向であることから継続的に存在した可能性が高いと考えられる。

### SD01関連施設についての考察

検出した長さが7m強あまりであるSD01について踏みいった考察は早いと思うが、この溝のすぐ北側には校舎が建っており、また校舎の下に潜り込む方向に走っているために擾乱されているものと思われる。そして、南側には校区内でグラウンドに出入り出来る唯一の場所であり、さらにも南には寛元寺があるために、今後開発に伴うSD01の続きの調査の可能性も薄いために、この溝の歴史的位置付けを試みたいと思う。

この溝は、本文中でも述べた通り規模が大きく防衛的側面があり、城館もしくは、寺院クラスの区画のどちらかであると見ていいだろう。ここで問題になるのは、西牟田地域には中世や近世の絵図などの存在がないために、現在の町の様相と文献上から推測しつつ、当該地でそのような施設が存在したのかを推測してみる。

まず、城館であるが、歴史的環境でも述べた通り、西牟田郷内には西牟田館跡、本村館跡、西古賀館跡、久保館跡など西牟田氏関連の居館の存在が知られている。それらの城館推定地は、西牟田氏館跡は真光寺の南側に位置し、本村館跡は久留米市三瀬町本村、西古賀館跡は久留米市三瀬町古賀にそれぞれ推定されており、久保館跡は位置不明となっている。だが、それぞれの館跡は現在でも小字名で残っている。調査区から南西方向に小字名で久保があるために、この久保館跡は久保周辺に存在していたと考えることが出来よう。よって、この地区に城館跡はないと思われるが、文献に記載がない城館の存在も否定出来ない。

発掘当初は調査区から北西に三方をコの字に囲む水路があったためにSD01もこの水路の一連だと考えて、何かしらの城館の方形区画だと想定していた。しかし、SD01の標高が高く、それら水路との比高差が2mあること。また、城館に付属する溝で考える場合には、溝の機能が近世まで続くことから、西牟田氏の領土ではなくて近世期に館跡をそのまま踏襲する屋敷等の施設が必要であり、文献上でもそのような記載がないために城館に付随する溝の可能性は低いと考える。

では、寺院についてみると、調査区の南側に位置する寛元寺は現在では境内の敷地面積は1000坪強ほどの大きさである。前述した通り近世の絵図などがないために、開山当時から現在の形であったのか、それとも変遷があったのかも含めて考察していくこととするが、残っているもので一番古い寛元寺の絵図は明治31年の大阪の大坂大成館が発行した『福岡県名所図録』であり、その絵図を見ると少なくとも明治の終わりには現在の形になっていることが伺える。

寛元寺の開山についても歴史的環境で述べた



Fig. 12 福岡県名所図録図絵

が、この寛元寺は臨済宗南禅寺派の寺院で西牟田弥次郎家綱によって寛元年間に創建されたと伝えられている。このような内容に触れてある資料には『筑後地鑑』などが知られている。また、寛元寺に伝わる古文書などによって当時の様相を垣間見ることが出来る。

まず、寛元寺古文書一覧の建長六年の文書は、村内の寛元寺阿弥陀・觀音堂に六町の免田を認めることを布告したもので、これ以前の仁治二年で阿弥陀堂・觀音が村内の民家に混在していたために火災などの恐れがあり、また从灯油料がないので荒野五町を免給し、二町を敷地として二堂を渡し造り、三町は開発耕作を行なうために免田にしてもらう事を申請していたものが許可されたことを示すものである。ここで注目される記述は敷地二町とあるところである。敷地二町ということは面積の単位であったと思われる。そのために、100m×200m程度の寺域だったと推測出来る。これを現在の地形図に当てはめてみると南北は寛元寺の南側にある東西道路から西牟田小学校の北側の東西道路までがおおよそ200mとなり、現在の県道筑後城島線から、寛元寺の西端が100mであり、それらを結んだ範囲内が建長六年に許可が出された寺域と想定出来るのではないかと思われる。

また、『寛文の社方開基』によると大永年間（1521～1527）に豊饒美作入道源永なる者が本堂を建立したとの記載や、現、寛元寺の西侧隅にある西牟田弥次郎家綱（寛元寺開山者）夫妻の墓である宝篋印塔に永正九年（1512）壬申十月二十七日との銘があることから16世紀前半に寺域の整備が行なわれたと思われる。これらの年代はSD01下層の年代観と一致する。また、SD01に切られた桶または曲げ物等を埋設した井戸跡があるために、この時期に整備をした際に多少縮小されたものと思う。よって今回発掘されたSD01は16世紀から19世紀にかけての寛元寺寺域の西限を区画する溝であったと推測する。

では、前述したように明治の後半には現在の形となっていた寛元寺がその形になったのはSD01の埋没した幕末期に近い時期になる。では、その時期として考えられるものを推測すると、明治維新による寺請制度の崩壊と廢仏毀釈を背景に政治保護を失ったため経済的要因によるものと僧侶の帰農化などにより縮小せざるを得なかつたものと推測する。

今回は少なく限られた材料で寛元寺の寺域変遷を推測してみたために、今後の資料増加によってはこれら一連の考察が変更される可能性もある事を明記する。



Fig. 13 寛元寺推定範囲図



現、寛元寺



宝篋印塔

寛元寺古文書一覧		
年月日	西暦	要項
正治三年二月十一日	1201	観音堂建立の為、田二町を寄進免税地とする
建仁元年酉二月	1201	観音堂修造記録
寛喜二年正月	1230	観音堂免田注文
仁治二年七月	1241	観音堂敷地並免田状
建長六年六月	1254	寛元寺阿弥陀・觀音の課役免状
弘安二年三月八日	1279	藤原家氏寛元寺への寄進状
徳治二年七月六日	1307	僧顕実、寛元寺に坊地田地を寄進し保証の書状
十日		淨西が所領を六十貫で僧顕実に売却
徳治三年二月十日	1308	寛元寺尼寺に田地三町、屋敷二ヶ所を淨西が寄進
正和		免田状
正和四年十月十六日	1315	寛元寺所領争いの裁決書状
建武三年五月	1336	寺伝にいう足利尊氏の禁制の書
貞和三年十月十九日	1364	三瀬庄内立野の土地の売券
正平六年十月二十二日	1351	勘解由法印添翰写
正平七年二月二十七日	1352	五条頼元の書状
正平十八年五月十二日	1363	元歎等三名の連署状案
明徳二年二月十日	1391	長西の土地寄進状
明徳四年二月四日	1393	家光外十三名の寛元寺への寄進状
応永元年十月十八日	1394	寛元寺元喜和尚に永代預けした書状
応永十二年七月二日	1405	寛元寺内の乱妨狼藉の禁制
応永十八年三月五日	1411	講衆より寛元寺への寄進状
天正十二年八月十六日	1584	靈鷲寺住職任許状
慶長十二年十一月十七日	1607	田中吉政より寛元寺へ五段七畝寄進状
天保十二年二月	1841	寛元寺雑錄

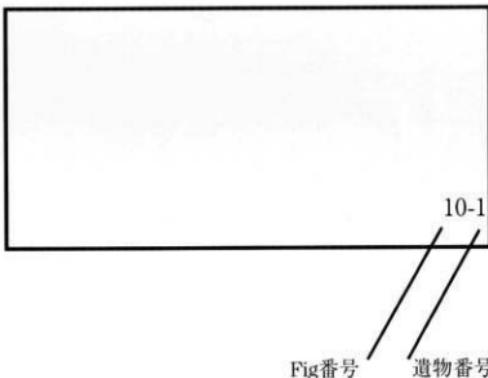
【参考文献】

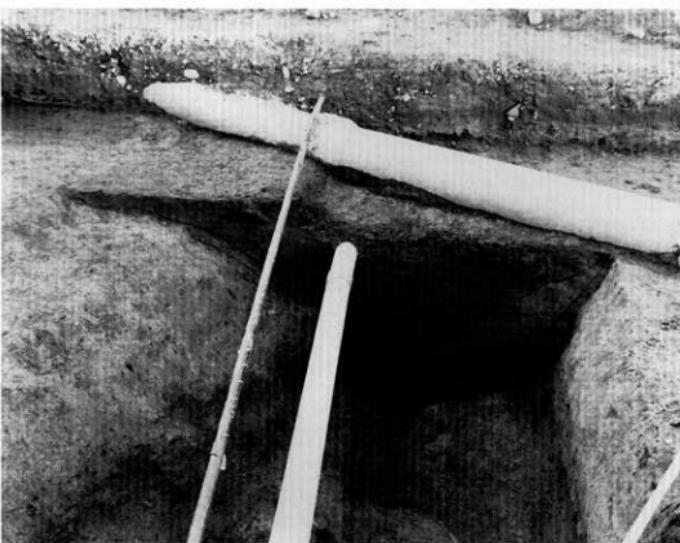
右田 乙次郎	『筑後市神社仏閣調査第三集（西牟田編）』	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会	1972
右田 乙次郎	『西牟田むらの生いたちの記』	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会	1973
筑後市編さん委員会・編	『筑後市史』	筑後市史編さん委員会	1998
白木 守編	『安武地区遺跡群Ⅲ』	久留米市文化財調査報告書 第87集	1994
清水 吉康	『福岡県名所図録図鑑』	大阪大成館	明治31年

# P L A T E

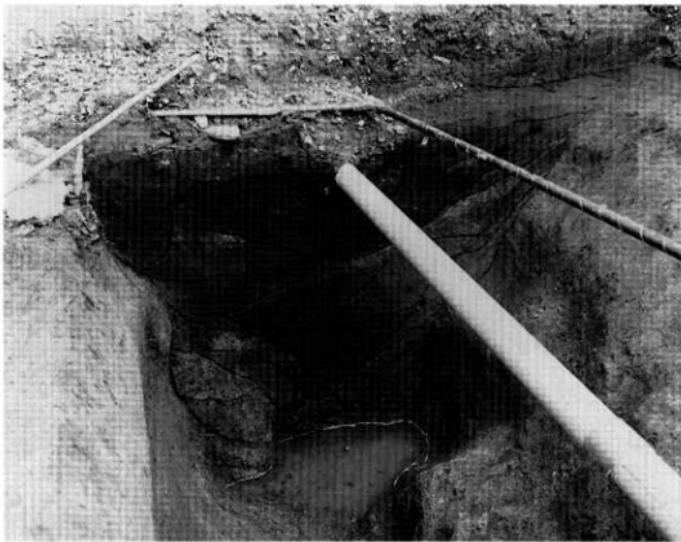
## 凡例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。

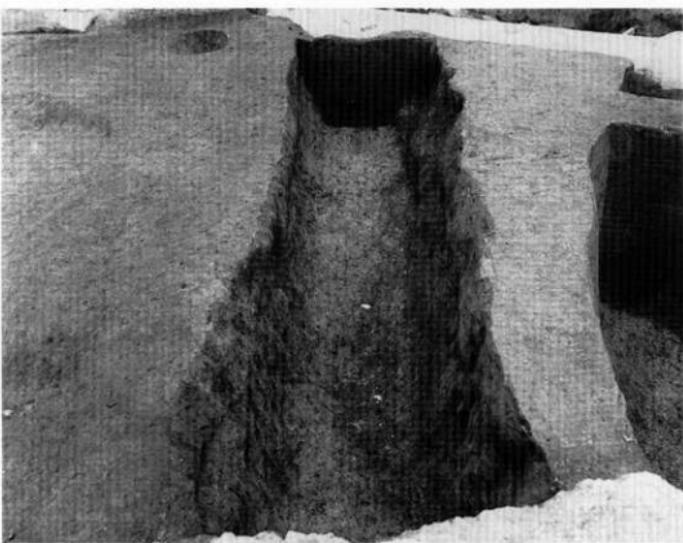




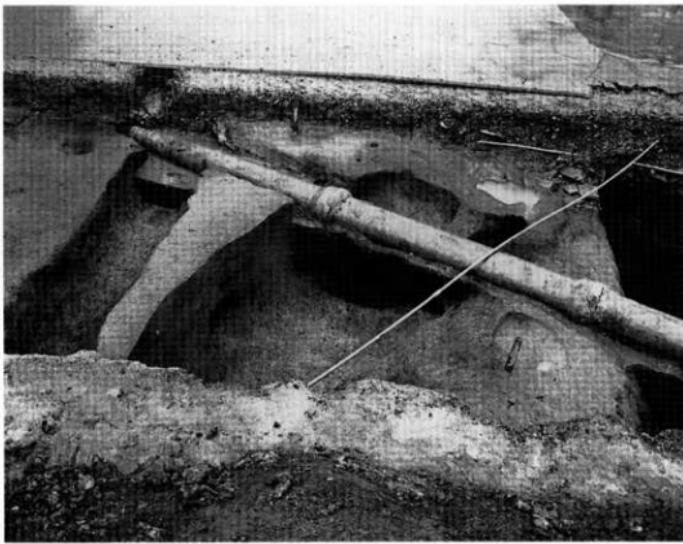
A区 SD01南壁土層



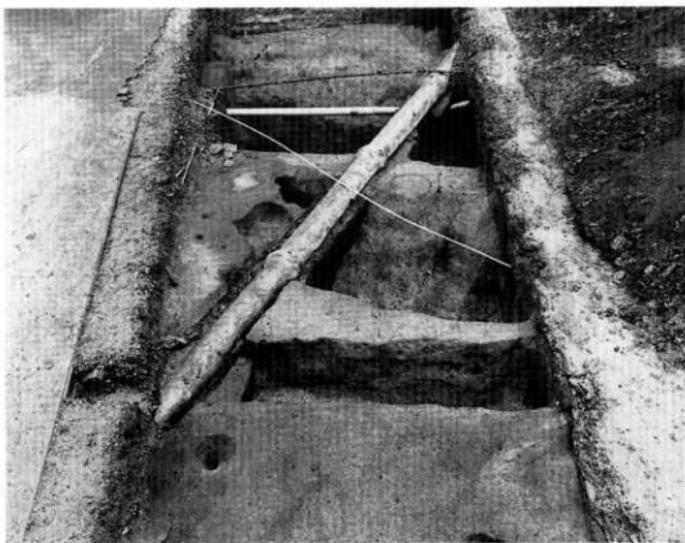
A区 SD01北壁土層



A区 SD02 (南から)



A区 SD03・SK04 (北から)



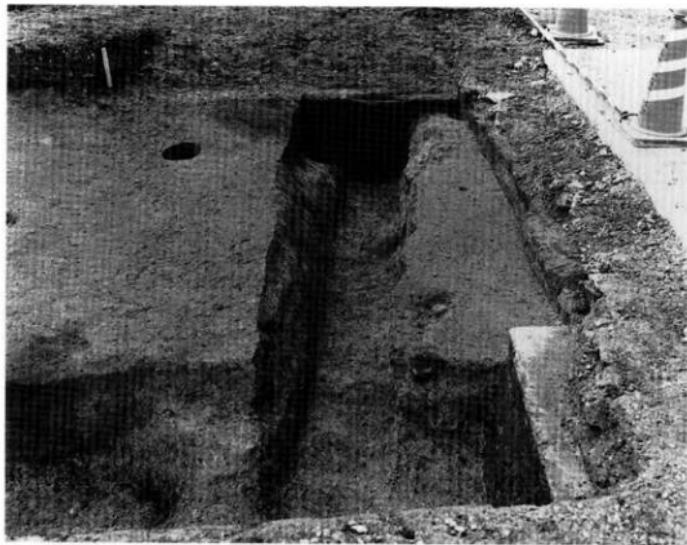
A区 全景（西から）



B区 調査前状況（南から）



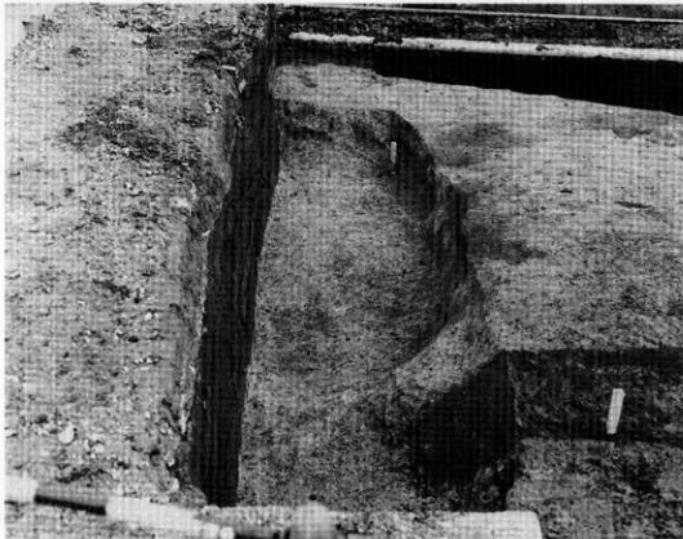
B区 SD01 (南から)



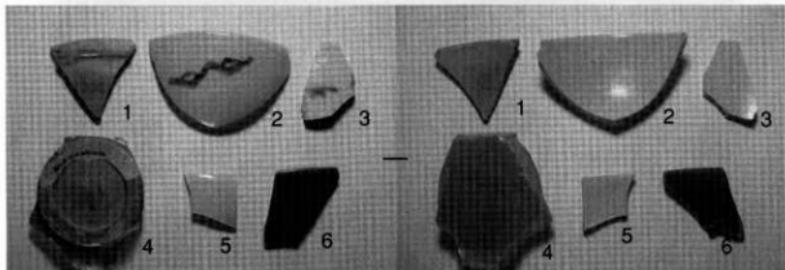
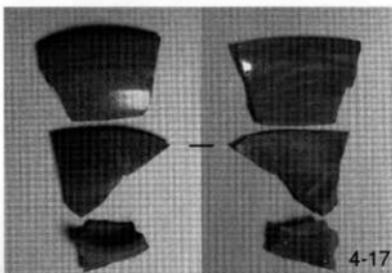
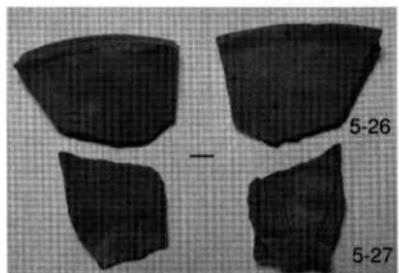
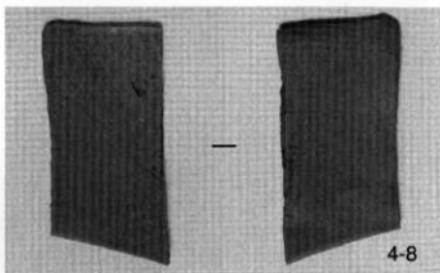
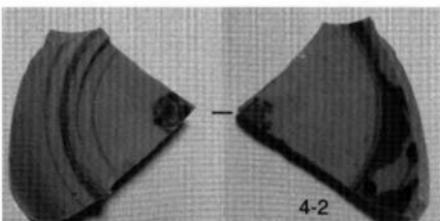
B区 SD02 (北から)



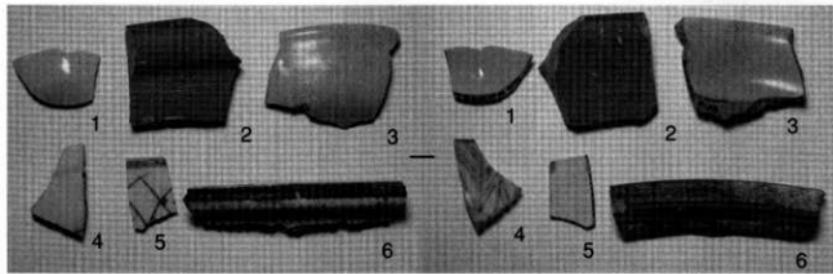
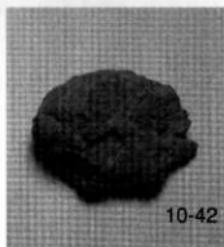
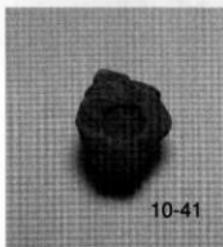
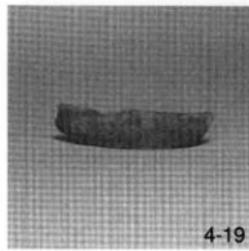
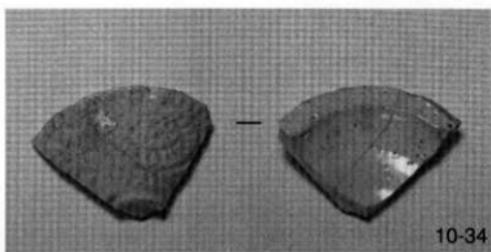
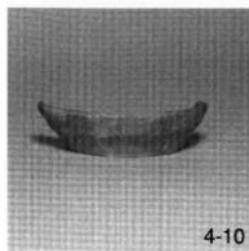
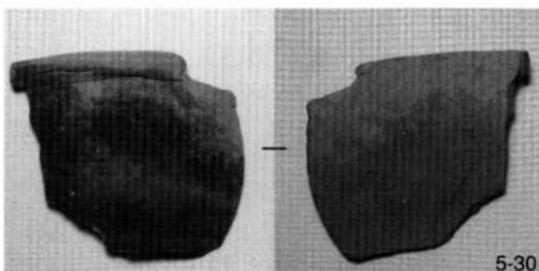
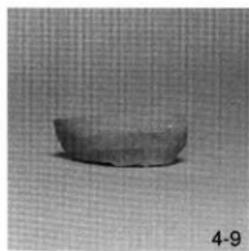
B区 SK06土層（南から）



B区 SK06（西から）



1 • 5-25    2 • 4-16    3 • 4-1    4 • 4-3    5 • 5-24    6 • 5-23



筑後市文化財調査報告書 第69集

**西牟田寛元寺遺跡**

平成18年3月31日

発行 筑後市教育委員会  
福岡県筑後市大字山ノ井898  
TEL 0942(53)4111

印刷 有限会社 新幸印刷  
久留米市小頭町10-2  
TEL 0942(38)0898